

花き産地を復活させ、故郷に活気を

名 称：^{たかはし}高橋 ^{ひでお}日出夫

所在地：相馬郡飯館村

【飯館村の避難指示解除状況】

平成 29 年 3 月 31 日 居住制限区域、避難指示解除準備区域が解除

【プロフィール】

避難指示解除に併せて平成 29 年 3 月に帰村し、花き栽培を再開。トルコギキョウ、アルストロメリア、カスミソウを栽培し、村内の花き栽培を牽引。

【震災前の経営と避難状況】

震災前、飯館村は花き栽培が盛んで、約 90 戸の農家が生産。特に高橋さんの住む関根・松塚地区は、村内でも花き栽培が盛んで、高橋さんはハウス 15 棟 (30a) を有し、トルコギキョウ、グラジオラス等の花きを 20 年にわたり栽培。その他に水稲 (25a) やブロッコリー (1ha) 等の野菜も栽培。

高橋さんの高い技術によって栽培された花きは、高品質で非常に花持ちが良いことで定評があり、市場から高い評価を得ていました。JA を通じて、福島市場のほか、栃木県、茨城県、埼玉県、群馬県の各市場へも出荷していましたが、原発事故により家族とともに福島市内に避難を余儀なくされました。

【営農再開のきっかけ】

高橋さんは、「避難が終わったら必ず帰村して花作りを再開する。」と決

意し、栽培技術を忘れないために避難先で花き栽培を再開することに。平成 24 年、福島市内で農地を借り、そこに村が復興交付金を活用してハウス 4 棟を整備し、高橋さんに貸与。平成 25 年 4 月から 3 棟 (7a) でトルコギキョウの栽培を再開し、後作として冬期にストックを栽培して、新潟市場や仙台市場へ出荷しました。



高橋日出夫さん

【取組の内容】

高橋さんは、飯館村が平成 28 年度福島再生加速化交付金を活用して村内に整備した花き栽培用耐候性ハウス (8 棟) を借受け、花き栽培の再開に向けて準備を進め、平成 29 年 3 月末の避難指示の解除に合わせて飯館

村の自宅に帰還しました。

平成 29 年 3 月にトルコギキョウを、5 月にアルストロメリアを定植。さらに、農家 4 戸で「かすみ草生産組合」を組織して、飯舘村が平成 28 年度福島再生加速化交付金を活用して村内に整備したパイプハウス（17 棟）の貸与を受けました。

高橋さんは、このうち 2 棟と原子力被災 12 市町村農業者支援事業で修繕したハウス 1 棟にカスミソウを定植し、飯舘村での花き栽培を本格的に再開しました。作付面積は、トルコギキョウ約 9a、アルストロメリア約 5a、カスミソウ約 6a（合計約 20a）で、震災前のおよそ 2/3 の規模です。

また、原子力被災 12 市町村農業者支援事業では、ハウス修繕のほか、堆肥運搬・散布車及び種苗を整備・導入しています。



トルコギキョウ（八重）

カスミソウは、会津若松市内の種苗会社から、飯舘村役場に栽培が提案されたものです。村が新たな振興作物として有望と考え、避難中の農家へ栽培を呼びかけ、高橋さんを含む 4 戸が取り組むことになりました。

カスミソウ栽培に取り組もうとした理由は、①市場でカスミソウ需要が

あったこと、②種苗会社の担当者自らがカスミソウを栽培しており、栽培技術指導を直接受けることができるからです。

高橋さんは、平成 29 年 7 月 20 日、「いいたての花」と印刷された段ボールでカスミソウ 170 本を大田市場へ出荷し、原発事故後、飯舘村から花きの出荷第 1 号になりました。つづいて 7 月からトルコギキョウ、8 月からアルストロメリアを出荷しています。

飯舘村で花き出荷を再開できたことについて、「村や種苗会社など様々な人の支援のおかげ。避難先で思い描いていたイメージどおりに花き栽培を再開できて嬉しかった。」と当時を振り返ってくれました。

平成 29 年度の花き出荷量は、トルコギキョウ、アルストロメリア、カスミソウとも、それぞれ 2 万～3 万本を生産し、8 割を大田市場へ、その他福島市場、村内道の駅へ出荷しました。平成 30 年は、前年同様に 3 種類を同規模で栽培していますが、カスミソウについては、6 月～8 月の夏季に加え、他産地の出荷が少ない 9 月～10 月の秋季にも出荷しています。



カスミソウ

新たに栽培したカスミソウについて、市場関係者からは、「飯舘は夜温が

低いため、他産地より1本1本が丈夫で長持ちする。最後の一輪まで咲き切る。」と高い評価を得ています。

また、震災後は、出荷グループで直接市場へ出荷しているため、市場から価格情報のほかに、品質の良し悪しなどの評価が直接伝えられる利点があります。例えば気温の高低により、収穫のタイミングを調整するなど、市場の要望に対しグループで統一的に対応することで市場関係者の信頼を得ています。

現在、村内には、小菊、ユーカリ、エリンジウム、ルリタマアザミ等の新たな品目に取り組む者、営農再開時に花き栽培に転換した者、新規就農者など少数ながらも様々な花き生産者がいます。これらの生産者は花き栽培・経営の模範として高橋さんを目標にしており、高橋さんは飯舘村の花き栽培の牽引役となっています。



アルストロメリア

【関係機関の支援】

飯舘村は、営農再開の振興作物の一つに花きを位置付け、福島再生加速化交付金を活用してパイプハウスを整備する等により、他の模範になりうる花卉農家を支援。ハウス等の施設を整備するだけでなく、各農家が栽培・出

荷して収益を得られるようになるまでのトータル支援を実施しています。

種苗会社は、村からの依頼を受けて各農家へ細かく栽培技術を指導。大田市場の花き卸業者は、年に数回、飯舘村を訪問して、市場の要望を直接伝えるとともに、HPなどで飯舘産花きをPRしています。

【課題】

花き収穫の繁忙時期には、出荷調製作業に多くの労働力が必要になるため、パート従業員を臨時雇用しています。村内の花き農家の中には、人手不足により必要な労働力を確保できない生産者もいて、規模拡大のネックとなっています。特に、村内のカスミソウは、新しい産地として市場から注目されつつあり、出荷量の一層の拡大を図るために収穫時期等の臨時雇用の確保が課題と考えています。

【目標・将来構想】

現在、花き栽培の主な労働力は高橋さんと奥さんの二人のため、当分、現状の栽培規模を維持する予定です。ただし、カスミソウでは前年の越年株を活用することで、5月頃から出荷する新しい作型が可能となり、他の産地の影響を受けない価格面で有利な販売により、所得の向上を目指しています。

飯舘村では、「なりわい」としての農業だけでなく、「生きがい」として農業を始める農家も年々増加傾向にあり、村内外より新たに就農を目指して相談に来る人や、現に高橋さんのもとで、就農に向け研修に励む若手農家もいます。また、営農再開を諦めた人がい

る反面、まだ迷って営農再開に踏み出せない人も数多くいます。高橋さんは、「自分を見て、花き栽培を再開する人、新たに始める人が一人でも増えてくれればうれしい。花き産地を復活させ、震災前のように、花で村に活気を取り戻したい。」と抱負を語ってくれました。

(平成 30 年 9 月)